

龍 灯

第 1 7 号

発行所 大阪市史跡 龍溪禪師墓所
 靈 亀 山 九 島 禪 院
 〒550 大阪市西区本町3丁目4-18
 ☎06-583-2725
 発行人 住 職 奥 田 啓 知 (智證)

兵庫県南部地震により亡くなられた方々に対し、謹んで哀悼の意を表しますとともに

椰子の実和尚の遺徳を偲ぶ

廿四代住職

弘 忠 大 和 尚 遷 化

弊師弘忠大和尚 年末より風邪にて掖済会病院に入院しておりました。二月三日午後七時四分に遷化（逝去）致しました。時に世寿七十九歳、僧臘五十四年、法臘四十三年でした。

前中に起露法式・鎖露法式。午後十二時三十分より津葬（葬儀・告別式）を、大本山黄檗宗管長 林文照猊下、総長 乾隆俊禪師をはじめ、四十人近くの内和尚方、その他西区近在の寺院方参詣のもと通夜両日で七百人近くの会葬者を数えました。和尚は、大正六年七月三日、九島院の長男として誕生。七才で、大本山堂頭 星野直翁管長猊下に就いて得度。本町小学校旧制市岡中学、大谷大学文学部仏教学科卒業の後、黄檗禅堂に掛錫修行。昭和十七年より二十一年までラパウル方面にて兵役を勤め、復員後、公立中学校教員・私立清風高校教師として勤務。師父榮忠和尚の常休寺転任

の後をうけ、昭和廿三年一月当院の住職になられ、廿五年十月廿二日に現今の本堂再建落慶法要を兼ね、晋山式を挙行されました。爾来、四大不調の為平成元年に退任されるまで、実に四十年の長きにわたり、誠心その任に励まれました。

昭和三十九年には、戦災で焼失した朱塗りの龍宮門を復元され、境内墓地造成や無縁塔建立庫裡増改築等々、鋭意、当院運営に心を砕き、当山復興発展につくされました。宗内においても、布教師や教育学諮問委員、座元検定委員、宗務支院長を勤められ、塔頭萬松院廿七代、常休寺十五代、松源寺十四代、久安寺十二代住職も兼務されました。また、大正元年より続いていた澤木興道老大師を迎えての坐禅会を引き継がれ、老大師示寂の後には、当時としては珍しい寺報「龍燈」を発行や種々の布教誌にその健筆をよく発揮されました。

地域社会でも、保護師や本町小学校同窓会会長として活躍され、晩年は、造詣の深い郷土史の講演や老人大学での講義などでのユーモアをまじえた話術は多くの方々の記憶に残っています。母校旧制市岡中学への思い入れは殊の外大きく、口をつけば市岡の話でした。

和尚は先代榮忠和尚ゆずりの美声の持ち主で、読経の声のよさは定評がありました。とりわけ「椰子の実」の歌は、兵隊時代の苦勞（和尚の左耳は上官からのびんたで鼓膜がやぶれ聞こえなかった）を思い出され、晩年、お月参りの折りにお檀家さん宅でよく歌われていました。本当に人柄のよい、気さくな和尚様でした。ご冥福を祈りつつご報告にかえます。尚、総代様より手分けして電話連絡を致しましたが、連絡できなかつたお家もあり、不義理致しましたことを、お詫び申し上げます。



阪神大震災緊急報告

一月十七日午前五時四十六分、最初横揺れ続いて激しい縦揺れ、次に横揺れの烈震。すぐにパジャマの上にセーター、トレーナーをはき、境内の観音像を見に行く。地盤が緩く倒壊していると思いきや、向きを山門方向に変えているだけで無事だった。北西方向に稲妻が走る。薄気味悪い地鳴りがしている。まだ余震の続くなか、境内墓地を一巡する。二家の墓地灯籠が倒壊しているのみで、墓石は無事であった。

ほととし、本堂に入ると内陣内は混雑を極め、御本尊は倒れ落ち、台灯籠が転がり、香炉が破損し、灰神楽がたっている。直ぐさま愚息の手伝いを得て御本尊をお立てし、寺族総出で掃除をする。

本堂の漆喰壁は処々段烈剝がれ落ちていた。観音像をよくよく見れば、御足元の蓮台の箇所が十五センチほどずれ再び余震があれば倒壊の心配があった。周囲に危険立ち入り禁止の表示、綱を張り、石材店に連絡するも、道路が渋



神戸市東灘区にある被災地の様子。多くの建物が倒壊し、瓦礫が散らばっている。

滞し到着が遅れるとのことだった。手当てを急ぐ必要を直観。先年会館工事で世話になった中山工務店に連絡するとすぐさま人夫五人がかりで三時間ほどで直してくれた。人の病気には掛かりつけの病院建物にも主治医としての工務店がいるものだ。有り難いことである。

八時すぎ、常休寺より電話あり、山門の瓦落し下罪吹っ飛び、コンクリート製の鐘楼は倒壊、本堂は壁がすべて崩れ落ち、支柱もおれ倒壊寸前の状態。位牌堂は無事だが、内部の納骨ロッカーは倒れ、骨入れが散乱し足の踏場もない有り様。墓地の墓石は九割り方倒壊、空前の被害とのこと。月参りは全て中止の連絡を入れ、テレビ報道に釘付けとなる。

十八日、昼より折り畳み自転車を購入。阪急伊丹駅倒壊のニュースが繰り返し報道される。明日、自動車で行けるところまで行き、自転車で行く休寺へお見舞いに伺おうと、月参りの休みを檀家に連絡を

している、午後六時芦屋の檀家の娘さんが倒壊した家屋の下敷きになり死亡した旨の電話がはいる。市役所は被災対策で混乱し、ご遺体まで手が回らないとのこと、大阪の方で茶毘に伏したいとのご希望であった。

早速、葬儀店と打ち合わせる。死体検案書と埋葬許可書さえ出れば、小林斎場で引き受けてくれる事となったが、交通事情が悪くご遺体を引き取りにいけない。輸送手段は施主がなんとか考えたとのことだった。電話がなかなかつながらず、やきもきする。

十九日早朝、入院中で肺炎を併発している弊師弘忠和尚

が危篤との報が、泊り込んでいた家内より電話が入る。直ぐさま家族をたたき起こし、車で駆けつける。結局、お見舞いに行くはずだった常休寺和尚と叔母さんが、交通大渋滞の中、六時間かかって来られる。芦屋のご遺体はその後故人の職場の同僚が八方手を尽くしてくれ、葬儀を引き受けてくれる葬儀社が見つかり大阪寺町の真言寺院で通夜、葬儀を行うこととなった。件の葬儀社は直ぐさまオートバイでドライアイスを届け、ご遺体が痛まないようにし、午前零時に出発した寝台車でご遺体を移されたそうである。弊師の容体はひとまず落ち着

が危篤との報が、泊り込んでいた家内より電話が入る。直ぐさま家族をたたき起こし、車で駆けつける。結局、お見舞いに行くはずだった常休寺和尚と叔母さんが、交通大渋滞の中、六時間かかって来られる。芦屋のご遺体はその後故人の職場の同僚が八方手を尽くしてくれ、葬儀を引き受けてくれる葬儀社が見つかり大阪寺町の真言寺院で通夜、葬儀を行うこととなった。件の葬儀社は直ぐさまオートバイでドライアイスを届け、ご遺体が痛まないようにし、午前零時に出発した寝台車でご遺体を移されたそうである。弊師の容体はひとまず落ち着

兵庫県南部地震により亡くなられた方々に対し、謹んで哀悼の意を表しますとともに

27日、深夜神戸に向かう。神戸市立鶴越(ひよどりこい)斎場での読経ボランティアに参加する為だ。5千人以上もの犠牲者が、混乱のなかで満足な回向も受けられず茶毘に伏せられている。アーユス(仏教国際協力ネットワーク)の呼びかけに、師匠の容体も安定したので、一日ではあったが参加させていただいた。

同斎場は地震の被害もなく、19日より震災犠牲者が茶毘に伏され、24日までに1000体を数える。駐車場に設置された自衛隊の祭壇を依り、ささやこしらえて頼を受け、各宗派の僧あたった。

読経ボランティア
震災犠牲者の茶毘
回向に全宗派

28日には、ご依頼のあった24体のご遺骨の収骨回向を、次々と飛来するヘリコプターや霊柩車からは、遺体が輸送され、平素無煙処理された煙が溜まり、同斎場の白壁も見えない。戦場のような情景である。

ご遺骨には、菊一輪とリンゴ三個、ジュース一個の供物を供え、宗派の別なく、全員で念仏を唱え、題目を唱和する。普段ではあり得ない。ここでは自然にでき、仏教本来の姿が現前する。宗教は、本来こうではいけない。平常時には、人間の我がそれを妨げる。こんな非常時の方が、人間は逆に人間らしくなり、宗教が宗教らしくなるのは何か悲しい気がする。

父親が息子をかばって、二人とも亡くなったご家族のご回向は、一同涙しつつ読経する。お檀家さんが危篤になったのですぐ帰れとの、携帯電話が入り、終了時刻の七時まで居れなかつたこと心残だった。六時間を要し9時に帰院する。

親が亡くなったとの報があり、取り敢えず親類に引き取っていただいた。二十一日、阪急伊丹線が新伊丹駅まで復旧したので、やっと常休寺まで水をお土産にお見舞いに駆けつける。車内は被災地向かう人々がリュックサックを背に大勢乗っていた。神崎川を越える時、屋根にブルーシートを掛けた人々が目立った。帰院すると魚崎在住の森下氏より、新築したばかりの新居は無事だが、近所の次男の家が倒壊、家族が避難して来ている。嫁の母が亡くなったとの報があり

お見舞いの電話もようやく通じつつあり、お檀家では四五軒ほど全半壊の被害にあつておられる。まことに痛ましいことである。夜の通夜、読経中、参詣者はしわぶきひとつししない。皆あの午前五時四十六分を自己のものとして味わっている。他人事でない震災。無常という言葉を今夜ほど身に沁みたくことはなかった。「無常に堪え強く生きていきましよう」と通夜終了後の法話を締めくくった。

◎阪神大震災に義捐金を募金する
日本赤十字を通じて震災義捐金五万円、黄葉宗青年僧の会に五万円を募金させていただきました。黄葉山では、震災の満中陰を三月七日、本山 大雄宝殿(本堂)にて平和祈願・戦没者慰霊法要と併修いたしました。

◎その他
中国残留婦人の帰国を実現する市民の会に、お賽銭収入より五万円を寄付させて頂きました。また、昨年同様、お寄せ頂いたカレンダーや文房具をワイリピン慰霊団を担当する奈良交通観光社に託しました。

檀信徒の皆さまへ

被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます



● 椰子の実と和尚

弊師弘忠和尚の葬儀で、唱歌「椰子の実」が、流れていたのをご存じでしょうか。長女がキーボードで、弔辞そしてお別れの時に奏でていました。

「名も知らぬ遠き島より 流れ寄る椰子(やし)の実ひとつ 故郷(ふるさと)の岸を離れて 汝(なれ)はそも 波に幾月・・・」

和尚はこの歌が好きでした。機嫌のよい時、よく歌っていました。お檀家さんのなかにも、和尚の歌をお聞きになった方も多いと思います。

和尚は四年間、南方ラバウル方面で兵役につきました。兵隊時代の苦労はどなたも同じでしょうが、ご多分に漏れず、和尚も上官にこっぴどく殴られ、左耳の鼓膜が破れまわった聞こえなかったのです。

和尚は戦争を憎んでいました。軍人恩給も永い間申請されませんでした。某市議員さんの勧めで、恩給をもらうようになって暫くの間、忘れていた兵隊時代を夢に見てうなされ、無意識のうちに布団を叩いていたと、和尚から聞いたことがあります。

和尚は晩年、アルツハイマー病を患いました。初期の頃、日増しに判らなくなる意識のなかでのお月参りでしたので、心配した家内が同行しましたが行く家々で、読経の後、涙ながらに「椰子の実」を歌っていたそうです。

歌詞の最後に「思いやる八重の汐々 いずれの日にか国に帰らん」とあります。和尚は南方の島で、どんな思いで暮らしていたのか、思いを巡らせずにはおられませんでした。

葬儀の際、「椰子の実」の音楽で和尚を送りたいとは、家内のたつての希望でした。

小衾も龕前(ひつぎの前)でお拝をしながら、在りし日の和尚の歌声を思い出し、涙しました。



◎ 常休寺復興浄財の勸募

伊丹市中野にある常休寺が、阪神大震災で壊滅的な被害を受けました。当院が空襲で被災したおり、戦災見舞いなどご厚情を頂いた寺です。金額の多寡は問いません。幾らかでもご喜捨賜れば幸甚です。

お願

編集後記

▼亥年は、亥が刻むに通じるとかで天変地異が起るとは、老師の弁。

▼亥年早々、あの大震災。被災された方々に対して、心からお見舞い申し上げるとともに、一日も早く復興できますようにお祈り申し上げます。

▼弊師弘忠和尚、先々代榮志和尚も住職された伊丹の常休寺が壊滅的な被害を受けました。寺を支える多くの檀家

さんも家屋の倒壊などで困窮しておりお寺の復興が危ぶまれています。▼当院が戦災で焼失した時、常休寺の檀家の方々より、戦災見舞い等ご厚情を頂いたと聞いております。

▼当院の被害など、常休寺に比すると数のうちではありません。今度は当院が常休寺にお返しさせていただく番だと考えています。

▼九島院寺院会計より幾分かご援助させていただきますが、皆様よりのご浄財のご喜捨をお願い申し上げます。

被災された皆様にご心からお見舞いを申し上げます

— 坐禅しましょう！法話だけでも如何ですか —

ご案内

円 通 宗 統 禅 会

毎月 17日
午後 6時半～8時半

場所 当院本堂と坐禅堂
坐禅指導 黄檗山萬松院奥田仁芳老師
提唱 龍溪禅師「宗統録」